

小学校三年の社会科を

こんなふうにやってみた

足利市立柳原小学校 川 田 信 子

(その一)

実践記録といえるようなものではないが、募集要項にあった「誰にでもできる可能性」「話し合いの場としての」「具体的実践記録ならどんなものでもよい」という事に力を得て、又自分のやってきたことをまとめて批判をいただき反省する良い機会と思ってまとめてみました。

四月初め先ずつき当った問題は、小学校三年の社会科は、子供達の住む郷土(足利)を中心にその学習が進められるべきであることは、わかっていたが、それをどう取扱ったらよいか。そして折角買わせた教科書はどうするのか、の二点であった。幸い六月末に出張所主催の社会科講演会に於て「小学三年生の社会科の取扱いについて」と題してこん切丁寧な講演を聞く機会を得て、疑問に思っていた二点を解明することができたことは、誠に有難いことであった。

即ち

(1) 小学三年生の主教材は「私たちの町や村」いわゆる学区社会の理解に立って、自分の町の社会を、時には県内のもの、あるいは全国のものとの比較関連において把えさせ、それを通じて社会の見方、考え方を育てること。

(2) 教科書は問題点の解決や、資料の一つとして、又は比較教材として、扱われるべきものである。という事であった。

右のような講演会を聞くまでに、私は自分なりの計画をたてて次のような方法で疑問に思いつつ学習を進めていた。

(一) 絵地図づくり

二年生の時に柳原校を中心とした絵地図を共同製作したことがあるので、今度は範囲を拡げて旧足利の絵地図をめいめいの子供にかかせ、少しずつ記号も入れさせた。

(二) 山の上から

次週各自のえがいた絵地図と弁当をもたせて、浅間山にのぼり、山の上から実際の町の様子と絵地図とを見比べさせた。ここで子供達が学び得たことは

○ 実際の方位と地図の方位との関係

○ 道路、施設、建物の実際と地図のそれらの位置の一致。(この点では非常な喜びをもって子供達は学習した)

などであったが、ここに問題ができた。それは自分達の絵地図にない名草、毛野、三重、山辺地区が山上から、はっきりと見られたことである。そして「あそこは足利ではないのだろうか」という疑問が生じてきた。そこで私は旧足利と大足利を区別して後は教室に帰って大足利の学習をすることを約して下山した。

(三) 大足利市

浅間山で問題が出たので、ここでもう大足利までとり扱うことにした。七町村を区わけしたプリントをわたし色別に塗り分けさせて地区名を記入させた。(あしかがP140 市域拡張図参照)そして三年前(昭和二十九年)に近隣の村が合併して大足利市になったことを説明した。そして山の上で見た渡良瀬川が地図のどの辺を流れているか、その他どんな川が流れているか。

山は？ こうして大足利市の自然のようすを、プリントして学習させた。

(あしかがP9 足利市の地勢参照)

四 旧足利の産物しらべ

(1) 人の住んでいるようす

つぎに私は、足利の産物に就いて学習させようと思って「人の住んでいるようす」と題して学習をはじめた。子供達に白地図をわたし大足利市にどんな割合で人が住んでいるかを理解させるためにあしかがP19の人口密度を参照して十万人の人間がどのように各地区に分配されているかを図示させた。記入後何か気がついたことはなかったか、発表させた。そして次の様な点に気付いた。



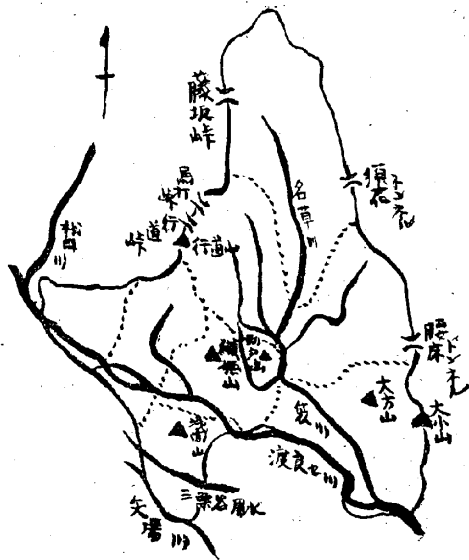
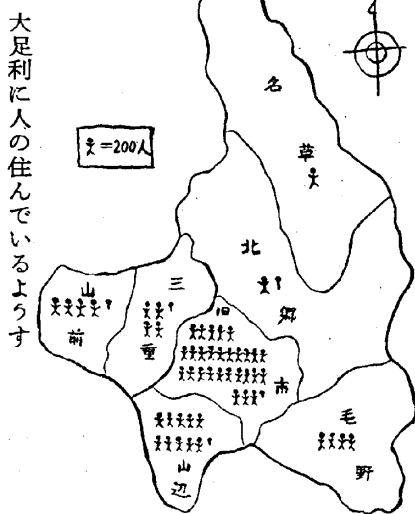
- 旧足利は狭いのに人の数が多い。
 - 名草は一番広そうなのに人の数が一番少ない。
- この事について「何故だろう？」という疑問がでてきて子供達は色々考えてたが、前に地勢の学習がしてあったので
- 名草は山が多いので、人が住めない。
 - 旧足利は平地であるし 渡良瀬川が流れているので人がすみ易い。

大足利市のしげんのようす

という子供同志の結論に達した。

(2) 職業しらべ

そこで私は「多勢の人が集まると一体何が始まるだろう」と発問した所「うるさくなる」「けんかが始まる」という



様なまとをはずれた応答ばかりであったが、そのうち頭のよいのが「多勢の人が仕事をしています」といつてくれた。これは「しめた」と思ったので、すかさず「それではどんな仕事をしているだろうか」ともちかけて、級の子供達の家の職業しらべを行うことにした。その結果、次の表のようになり、工場かんけいの、しごとが一番多く（小規模工場・工員・工場の事務員・下請しごと（その次が商人で、農家が非常に少ないごと）を知った。これを更に旧足利全体と比較して（%は説明しないで数の大小だけで比較させた）旧足利には工場が多いと

いう結論に達した。尙その際、洋品店の子供が「家には職工さんがズボン等買いにくる」といった子もあるし又、飲食店の子供は「夕方は女工さんがおそばをたべによる」と有力な発言をしてくれた。

(3) 旧足利の産物 (産物集め)

そこで「家の人は何を作る工場へ行っているか」聞いた所「メリヤス工場」「ナイロン靴下を作る」「糸を染める」「整理屋」「家ではたを織る」等の応答があった。

私はここで、足利の有名な産物が

- おりのもの
- メリヤス製品
- ゴム製品
- プレス製品の四つであることを教えた。

それから皆で「産物集めをしようではないか」ということになり、グループ別に蒐集を始めた。かくして集められたものは、家で織っていると言う銘仙、結城、家で染めていると言う友禪、又はお父さんの勤める工場でできたという美しい色彩のメリヤス生地、隣りのお姉さんからいただいたという変わった編み方のメリヤス、近所の工場で集めてきたという洋服生地やオパール、親戚のプレス工場(山辺)でもらって来たという急須、コップ、杓子等、自分が今迄はいていたというアキレスの運動靴、そして私も足利産のナイロンのブラウス、靴下ビニール靴など持参した。たちまち教室は小さなデパートに早変わり子供達は私をも含めて歓喜の腫を輝かせて、これらの産物の前に集った。「こんなにきれいな生地が足利で、できるの」「私たちの使う、急須やお盆や、ボールも足利でできるの」と、とても賑やかなことであった。

(4) 工場見学

さて一体これらの製品は、どの様に作られているのか調べるために、工場見学をすることに相談が纏った。都合の良い事にPTAの会長さんが、メリヤス工場を経営して居られるし前副会長さんのお宅ではプレス工場を経営して居られるので、此処を見学させていただくことにした。又学校の裏の学年部長さんの所では、ボタンを作って居られるので、ここもついでに見せていただくことに交渉を進めておいた。

六月の始め、雨上りの中を、先ずメリヤス工場へ

- (1) メリヤス工場……ここでは原糸の整練から、漂白、染色、乾燥、そしてそれをメリヤス機械にかけて、面白いように編み上って行く所から、婦人用の靴下を作っているのも見せてもらった。又幸いこの工場に子供の母親が勤めていた。見学後会長さんから足利のメリヤス工が発展の途上にあること。メリヤス機械はドイツのものが性能が高いこと、足利では今年中に五十台を購入の予定であること、製品の販売先は大阪、名古屋(約八割)東京(二割)で

おひしゃく	あきない	こうば	こういん	かいしいゃん	うものをつくる	そのほか	みんな
3	15	6	8	7	5	17	61
5%	25%	43%				27%	100%

(子供の家の職業しらべ)

農	業	商	業	工	業
5%		11%		80%	

(旧足利に於ける職業別人口分布)

あしかが産業経済参照

そのものによつては「足利のメリヤス」として遠く国外へもどンドン送り出されていること等のお話をおききすることができた。その時 会長さんから特に「ドイツの機械に日本の機械はおいつけないでいる。これはとても残念なことであるから皆も今から一生懸命勉強して外国に負けないような機械を作り出すようにしてもらいたい」という話があつた。子供なりに何か感じたらしかつた。

(4) プレス工場

こゝは二工場に分れていて第一工場では、原板をシャーリング（切断機）にかけて、之を製品の大きさに切断し油ぬり——絞り（型にプレスする）——縁切りの工程を経てキャンペットや御飯蒸しのできる所を見せてもらった。大きな機械が上から下りてきて非常に危険であるが、プレスされて色々の型になるのを、皆かたずをのんで見学した。

第二工場では仕上げをやっていて第一工場のできたものを磨いていたり色染めをしていた。此処では玉杓子に電気を通して表面に微細な穴をあけ染料をこの穴に入れる方法で、お茶で染めていた。この工場長さん（前副会長さんの息子さん）からは、次のような有益な話を聞かせていただいた。足利には約二十二、三軒のプレス工場があり（山辺も入れて）年間六億円の生産高で、全国で第二位を示していること、又販売先は全国にわたり、香港、東南アジア、中共、ハワイ、米本国にもおくられているということ。今迄プレス製品は家具のみであつたが現在では船舶、アルミ電線、コンデンサー、蓄電機、汽車等用途が広く有望であるということ。

(5) ボタン工場

帰校途上ボタン工場へ寄つた。こゝではユーライトという合成樹脂の粉末（色はいろいろある）が、型に入れられて、圧力と熱をかけられると飴細工のように簡単にボタンの形になって出てくる。之を縁どりして穴をあけ、磨いて仕上げ、私たちの使えるボタンになるのである。その他、化粧品きれいな容器もできたのを見せてもらった。あんな粉末が簡単な操作で、ボタンになるので子供達は不思議な機械の力に驚いていた。生産高は一日七千から八千個だそうで、東京の間屋へおさめてから全国に販売されるそうだ。

以上、三時間半の間にこれだけの工場見学ができたことは、とても有効であつた。

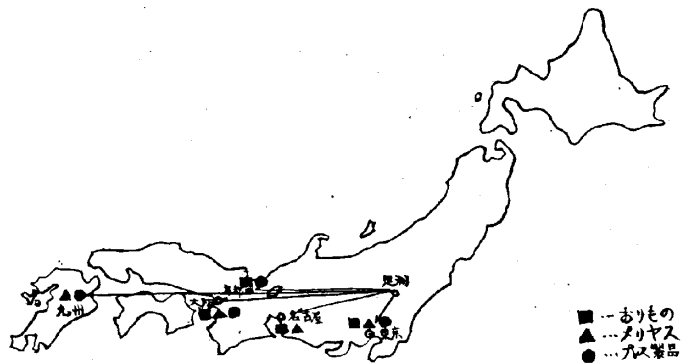
見学後ノートに整理をし各工場宛に礼状を書かせた。

(5) 産物しらべのまとめ

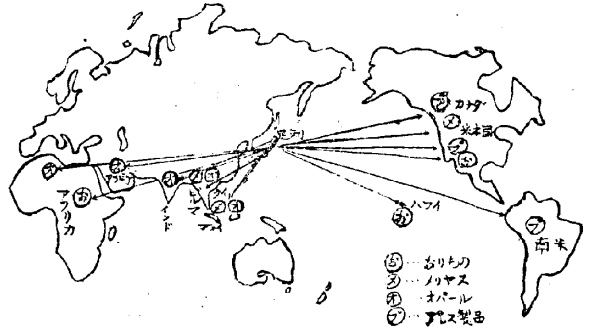
産物あつめや、工場見学をして学習することのできたこれ等の製品の販売先を整理し他地域との結びつきを考えた。

足利で、できたものは、どこへ売られるのだろうか

即ちメリヤスは、東京・名古屋・大阪・九州にさらに遠くはカナダ・タイ・ビルマ・マライの東南アジアに販売され、オパールは東南アジア・アフリカ・印度・アラビヤ方面にかつて向けられていた。プレス製品は東京・大阪・京都・九州に国外へはアメリカ合衆国・



カナダ・南アメリカへと進出しつつある。おりものは、東京・大阪・京都・名古屋・更にアメリカ・アフリカ・ハワイ・中国へ販売されていることを知った。ここで日本地図や、世界地図ができて、三年生には、程度足利で、できたものが、外国でもつかわれている



その父親は多忙で、常に大阪や名古屋方面に出張しているということであった。ここで足利の産物が、織物からメリヤスに変わりつつあることをおぼろげながら理解した。そしてメリヤス工場を経営するPTA会長さんの話の中にあつた「足利織物は色染めがわるかつたので、とても不評をあげて足利織物の信用を落してしまつたので、今後メリヤスに変わつてからは、特に国外向けもあるので、染色は堅牢で、美しい色彩をつけることを工夫している」という話につけ加えて、私からメリヤス研究所やメリヤス協同組合が作られた意味について話した。そして私たちは、足利の産物がどの地方へ行つても、どの国へ行つても、信用されるような、誠意ある仕事をしなければならないということ、旧足利の産物しらべの結論とした。

伍 他地域の産物しらべ

さて、それでは一番人の数の少ない名草では「どんなしごとをやっているのだろうか」という疑問が子供の間からでてきた。そこで先ず、名草に親戚のある三人の子供に「親戚の家ではどんな仕事をやっているか」と聞いた所、Aは「すいか、しょうが、胡瓜など作つて、足利へもつて行つて売っている」という話。Bは「すいか、トマトなどのやさいを作っている」Cは「名草の奥で、いちごをつくつたり、栗をとつて、足利へもつて行つて売る」などということがわかつた。更に去年本校へ、名草から転任になつた先生にもお聞きした所「梅干にする梅はずい分作られ、もも、いちごとともに、足利へ売り出されている」という話を聞くことができた。

更に北郷や、その他の地区も、子供の親戚や、先生方に聞いた話等をもとにして、次の様な絵図を作りあげた。



- 名草……しょうが・栗・桃・梅・イチゴ・胡瓜
- 北郷……米・胡瓜・キャベツ・さやぶどう
- 毛野……ナス・大根・人参・白菜・カブ・午萵・速成トマト
- 山前……おりもの
- 三重……おりもの
- 山辺……プレス工業

この学習がおわつた後、工場、特に大きな工場は大足利市のどの辺にあるかを考えさせた。そして、工場が平地に、とくに渡良瀬川の沿岸に、又両毛駅や東武駅を中心とした地点にできていることを見い出させた。

以上で第一学期の社会科の

学習を終了した。所要時間は五十二時間であつた。